

# 西洋古典学フォーラム「人と技術」

司会

納富 信留（東京大学）

趣旨説明

早瀬 篤（京都大学）

報告

河島 思朗（京都大学）

早瀬 篤（京都大学）

川本 悠紀子（名古屋大学）

池口 守（久留米大学）

藤井 崇（京都大学）

全体討論

2025年6月8日（日）

日本西洋古典学会 第75回大会

於 慶應義塾大学

主催 日本西洋古典学会

共催 慶應義塾大学言語文化研究所

協賛 西洋古典学連携共同研究会

## (趣旨説明)

本フォーラムの目的は、西洋古代における「技術」(τέχνη, ars) および「専門知識」(ἐπιστήμη, scientia) について、これらの理論や説明、これらを教育・運用する人々、そしてこれらを必要とし支える社会という多様な側面に光を当てながら、包括的アプローチを試みることにある。もちろん、これまでも西洋古代における技術・専門知識はポピュラーなテーマのひとつだった。例えば、技術哲学や技術倫理学といった分野は20世紀後半以降にとくに発展したが、そこで用いられる概念的な枠組みはプラトンやアリストテレスの深刻な影響下にあることがよく知られており、この観点から彼らの技術論は詳細に研究されてきた。しかしそのときに古代社会の技術者や社会との関わりに話が及ぶことは稀である。西洋古代における技術論は、その当時に技術を行使していた人々や当時の社会や文化を背景として提出されており、それらの要素を含めて研究することで、より十全な理解に到達できると期待できる。言い換えるならば、我々の技術や専門知識に対する考え方が西洋古代からどのような影響を受けてきたのかをよりよく理解するために、あるいはその差異を明らかにするために、西洋古典学の分野横断的な研究が求められると思われるのである。そこで、本フォーラムでは、哲学・文学・歴史などの異なる分野の専門家が力を合わせて、包括的パースペクティブのもとで、西洋古代における「人と技術」に含まれる諸問題を議論してみたい。

(報告要旨)

西洋古典文学における人と技術と神々

河島 思朗 (京都大学)

人は技術を使い、日々の糧を得て、さらに文明を発展させてきた。ときに技術をもってしても人は労働に苦しむが、一方で技術は人に驕りを持たせることもある。技術は人が生み出した力の象徴のように感じられる。しかし、プロメテウス神話にも表れるように、「火」に代表される技術は、神々から授けられたものであった。神話の息づく古典古代においては、人と技術の結びつきを考えると、人間を超える存在を忘れることはできない。本報告では、いくつかの文学テクストをもとに、人と技術と神々の関係に目を向けることで、議論を喚起したい。

ソフォクレス『アンティゴネ』第1スタシモン「人間賛歌」においては、人が生み出したさまざまな技術が提示される。そして、その技術ゆえに、人は恐るべき存在とみなされる。人は技術を用いて不可能に思われることを成し遂げ、人を取り巻く自然を忘れることさえある。しかし、依然として、神々や自然の存在は大きく残っている。ウェルギリウス『農耕詩』第1巻においては、人が農耕の技術を用いて労苦する起源がユピテルにあると語られる。農耕は自然との戦いのように描かれ、たゆまない努力を必要とする。それは、人間には制御しきれない世界への挑戦と言いうるかもしれない。オウィディウス『変身物語』第6巻で語られる「アラクネの物語」においては、織物の技術を誇るアラクネが、その技術の起源であるアテネと競技する。その出来栄はアテネに匹敵する、あるいは超えるほどであった。しかし、それでもなお神々の力は人間を凌駕する。

人と技術の関連に着目するとき、人間を超える存在が現れてくる。その視座は人間の営みを相対化する役割を担っているのではないだろうか。

## プラトンにおける技術の定義と体系化

早瀬 篤 (京都大学)

プラトンは「総合と分割の方法」を用いて体系的に整理されたものだけが「技術」の名に値すると考える (cf. *Phdr.* 266d, 270d-e; *Phlb.* 16c)。しかしこのとき想定される具体的手続きは、これまで十分に理解されていないと思われる。ガレノス以前にまで遡りうる従来の解釈では、総合と分割の方法には二種類の適用があるとされた。ひとつ目は、*Phdr.* 237b-238c の〈恋〉の定義や *Sph.* の〈ソフィスト術〉の定義のように、或る対象を定義するための適用であり、二つ目は *Phdr.* 269c-272b の〈弁論術〉の分析や *Phlb.* の〈快樂〉の分析のように、或る対象に含まれる諸要素を分類するための適用である。私はこの解釈が誤りだと主張するつもりはないが、この解釈が固定化された結果としてプラトンの手続きのもっと重要な側面が見落とされてきたと考える。

本発表で私が提案したいのは、プラトンは、最初に或る技術を定義し、次にその定義にもとづいてその技術を体系的に整理するという手続きを想定していたということだ。この提案のために、私は、最初に、或る技術の体系化はその定義に依拠していることを示し、次に、或る技術の定義はその体系化を準備していることを示す、という手続きをとりたい。最初の点については、*Cra.* 422c-425b における〈名前制定術〉の定義とその体系化および *Phdr.* 271c-272b における〈弁論術〉の定義とその体系化にもとづいて論じる。そして後者の点については、*Sph.* と *Plt.* における諸技術を定義する手続きを、体系化を準備することが示された〈名前制定術〉と〈弁論術〉との定義と関連づけながら論じることにしたい。例えば、技術の定義の手本とされる *Sph.* 219a-221c の〈釣り術〉の定義に関しては、①その技術が何を成し遂げるのか、②何を対象とするのか、③ (どんな状況で) どんな手段を用いるのか、ということがこの順で特定されている。私は、これらの要素が、*Cra.* と *Phdr.* において〈名前制定術〉や〈弁論術〉を体系化するためにそれらの定義から取り出される情報に、対応する情報を提示していることを明らかにしたい。

プラトンの技術論が後代の諸技術の専門化や教育方法に与えた影響は甚大なので、プラトンが精確にどのような手続きによって諸技術が体系的に整理されるべきだと考えていたのかを理解することは、古代世界における技術の

あり方全般を理解するためにも価値ある貢献となるだろう。

## 古代ローマ世界における「建築家」とは？

川本 悠紀子（名古屋大学）

ウィトルウィウスの『建築書』の第一章では、建築家に必要とされる知識について語られている。作品は制作 (*fabrica*) と理論 (*ratiocinatio*) によって生み出される (Vitr.1.1.1) といい、こういった経験を積んだもののみが権威を得ることができたという。さらに彼は、文学、描画、幾何学、歴史、哲学、音楽、医術、法律、天文学 (星学) にも通じているのであれば、なおさら良いと述べ、これらの学問領域についても『建築書』で説明を行っている。ウィトルウィウスが本書で示した、目指すべき建築家像に叶う人材はなかなかいないだろうが、古代ローマ時代、建物を建てる上で仕事に従事していたのはどのような人だったのだろうか？

古代の著作の中には、建物を建てる際に働くものとして職人 (*faber*) と建築家 (*architectus*) を挙げているものがあり、この二者は区別して捉えられている (cf. Colum. 1. Praef. 4)。ウィトルウィウス自身、欠陥のない良い建造物を作る時に、建築家は職人や素人から (*a fabris et ab idiotis*) 意見を聞くことでよい建物が作られることもあるとしている (Vitr. 6.8.10)。ここでの素人は、建設作業に従事する一般の労働者を指していると考えられるが、いずれにせよ、建築に関連した作業をする技術者同士であっても、ウィトルウィウスは職人と建築家とを明確に区別しているのである。

本報告では、文献史料や碑文、さらには壁画などの図像を通して、「建築家」とはどのような立場の人だったのかを検討する中で、当時の人々の技術と技術者への認識について考えたい。

## 船舶の技術と古代ローマ社会

池口 守 (久留米大学)

いわゆる古代経済史論争において、古代の経済を近代経済に類似するものと認めるには、一定期間にわたって経済成長があったことを説明しなければならない。経済成長の前提条件と考えられているのは技術革新である。無論、古代においても技術の進歩はあり、それは考古資料によって証拠立てられてはきたが、生産性を大いに向上させる「技術革新」と呼べるものは殆どなかったとの通説は今も根強く残っている。発明を重視しないメンタリティーは、経済的合理性の欠如というプリミティヴィストの見方にも関連するが、近年ではこれに加えて、「母なる自然」を尊重するストア派的道徳観に根ざすとの説も出ている。

ところで、技術革新と経済との関係はさほど単純ではない。まず、新たな技術が発明されても、それがいつどこで普及するかは別の問題である。普及の決定要因となるのは、人口や人口密度か、投資家と資本の存在か、労働力のコストの問題か。そもそも、技術革新が経済を発展させるというよりも、社会的・経済的環境が新たな技術を要請した結果として技術革新が起こるとも考えられるのではないか。

本報告では、技術と社会の関係の一端を映し出すものとして、船に関連する技術の進歩・普及の問題を扱う。難破船のデータやモザイク画等の図像資料をもとに、造船、艀装、港湾築造などの技術とその普及の度合いを概観し、技術と社会の双方向の関係性を考えてみたい。

古代ギリシア・ローマ世界における水車の開発と利用：自由と格差  
藤井 崇（京都大学）

本報告の目的は、古代ギリシア・ローマ世界における技術革新とその普及を、当時の社会、とりわけそこでの政治的自由と経済的格差と関連づけながら考察することである。古代世界に存在したさまざまな技術革新のなかでも、本報告では、主に製粉に利用された水車を取り上げる。初期アナル学派を代表するマルク・ブロックは、1935年に発表した論文において、古代に発明された製粉用水車は安価な奴隷労働力が存在する古代には普及せず、中世に領主権が拡大する過程で使用が広まっていったと論じた。報告者に中世の水車について語る能力はないが、古代に関して言えば、古代経済の近代的性格に注目する近年の学界動向のなかで、一定程度の技術革新があったことを認める傾向がある。本報告はまず、この立場にある研究者たちがヘレニズム期後期とされる製粉用水車の発明と、ローマ帝政期におけるその普及をどのように論じているかを整理して、(史料はきわめて限られるが)その妥当性を検証し、そのうえで、彼らの議論の背景にある前提に注目したい。

古代の技術革新とその普及を積極的に論じる研究は、相反する二つの社会像を前提としているように思われる。第一に、技術革新が生まれる土壌として、アイデアの自由な交換が認められる比較的平等で、民主政的なギリシア都市社会。第二に、新しい技術の実装を可能とする資本が存在する、経済的格差の大きいローマ帝国社会、である。報告者は、研究者の前提となっているこの二つの社会像に着目することで、新しい技術が生まれ活用される条件とは何かという問題にたいし、一つの話題提供をしたいと考えている。